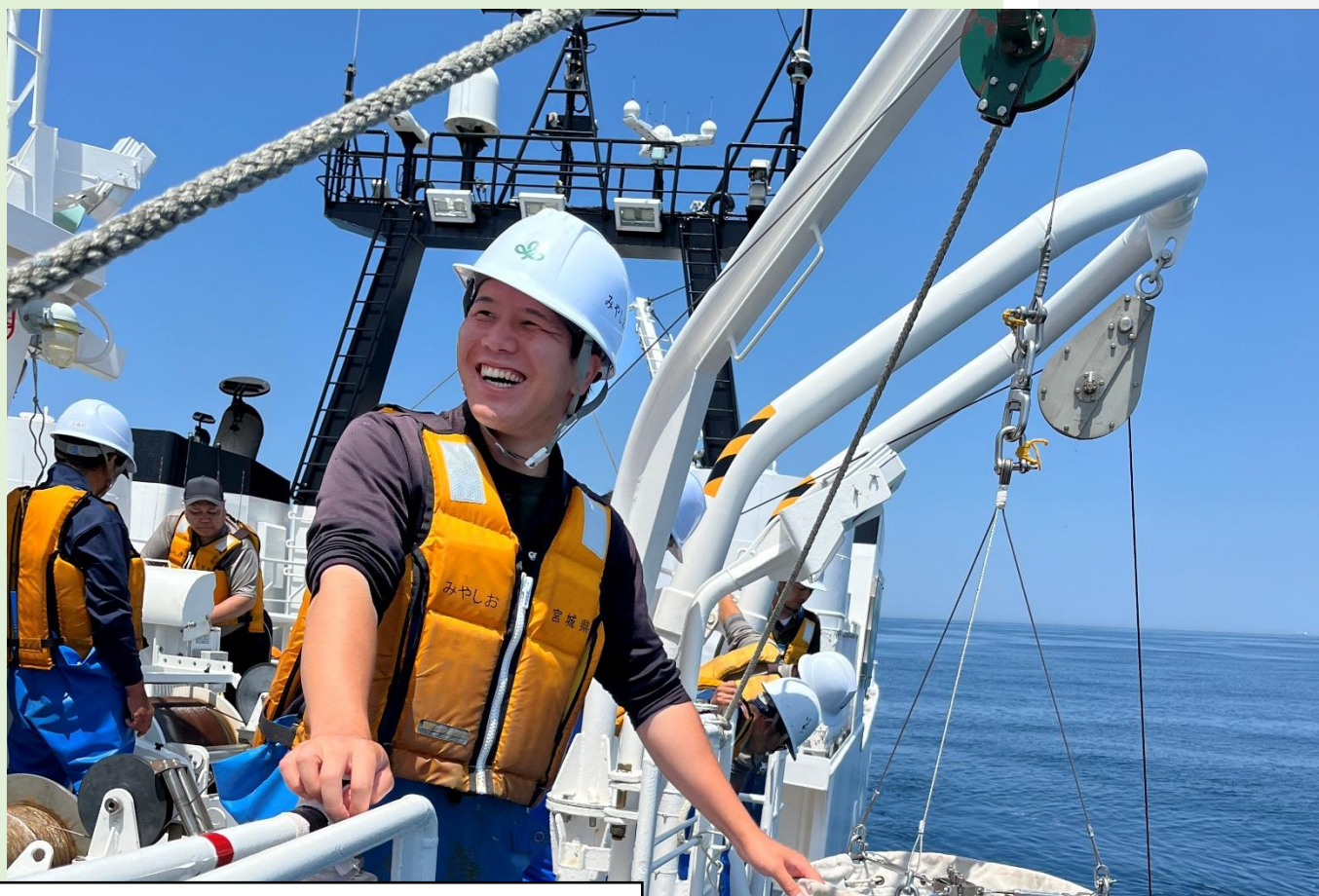


宮城県水産技術総合センターだより

2025 年 11 月 28 日発行 第 3 号



漁業調査指導船「みやしお」による沿岸定線調査

当センターでは、みやしお（199 トン）、開洋（19 トン）の 2 隻の漁業調査船が配置されており、海洋観測や資源調査等を行っています。

多くの魚種において、漁場の形成は海況の影響を受けます。このため、刻一刻と変わる海況を定期的に観測することは大変重要です。両調査船で沿岸定線調査、浅海定線調査を毎月行い、結果を漁海況情報として取りまとめ提供しています。

（環境資源チーム）

目次

研究内容の紹介

マボヤの貝毒対策に関する研究（気仙沼水産試験場地域水産研究チーム）	1
三倍体マガキについて（第一養殖生産チーム）	2
仙台湾のアカガイ調査報告 ～大型アカガイが生息する操業区域外の重要性～（環境資源チーム）	4
未来へつなぐ海の恵み ～アカガイ種苗生産の取組～（第二養殖生産チーム）	6
暖水性魚種及び低・未利用魚種の活用に向けた取組（水産加工開発チーム）	7

普及情報

養殖ワカメの「ブチ」について（気仙沼水産試験場普及指導チーム）	9
イワガキの人工採苗支援（企画・普及指導チーム）	10
トビックス	11

マボヤの貝毒対策に関する研究

気仙沼水産試験場地域水産研究チーム 主任研究員 田邊 徹

はじめに

宮城県沿岸では、春季に麻痺性貝毒、春季から夏季にかけて下痢性貝毒の発生により、濾過食性生物が毒化し産業上大きな影響を及ぼす。このうちホタテガイでは、貝毒成分が主に蓄積される中腸線を除去する処理加工を行い、無毒化を図ることで貝毒の発生期間中でも水揚げができるルールを整備し運用されている。麻痺性貝毒については 2020 年に宮城県で初めてマボヤで規制値を超える毒化が確認され、以後、たびたび自主規制措置がとられている。

宮城県がトップクラスの生産量を誇るマボヤは、貝毒の発生期間である春から夏にかけて出荷の盛期であり、この期間の貝毒による出荷自主規制措置は産業上非常に影響が大きい。本研究は、これまで十分に知見のなかったマボヤにおける麻痺性貝毒及び下痢性貝毒の毒成分の器官偏在を明らかにし、処理加工による除毒や減毒の可能性について検討することを目的とした。

研究内容

宮城県沿岸でマボヤが下痢性貝毒により毒化した 2017 年に、宮城県気仙沼市階上地先で畜養していたマボヤとムラサキイガイについて下痢性貝毒成分の分析及び漁場環境調査を併せて行い、両種の毒量を比較することによりマボヤの下痢性貝毒の毒化要因を確認するとともに、マボヤの毒成分の器官偏在について明らかにした。また麻痺性貝毒により高毒化した 2020 年に女川町塚浜地先において養殖されていたマボヤをサンプリングし、経時的に器官ごとの毒成分の含有量を分析し、マボヤの麻痺性貝毒の器官偏在や、毒組成の変遷について明らかにした。

得られた成果

マボヤについて、下痢性貝毒の毒成分は期間を通じて肝臓でのみ検出され、また検出された毒濃度

はムラサキイガイよりも低かった。このことから、下痢性貝毒成分はマボヤの肝臓に偏在していることが明らかとなった。

機器分析の結果、マボヤでは、期間を通じて個体内にある毒のおおよそ 8 割が肝臓に偏在していることが明らかになり、肝臓の除去による処理加工で基準値を下回る除毒や減毒もできる可能性が示された。

本研究は、マボヤの貝毒対策として、肝臓の除去を行う処理加工により可食部に含まれる貝毒の除毒や減毒が可能であることを明らかにし、ホタテガイと同様のルールを定めることにより、貝毒による出荷自主規制期間中の水揚げの可能性を示した点を評価され、令和 7 年度全国水産試験場長会会長賞を受賞した。

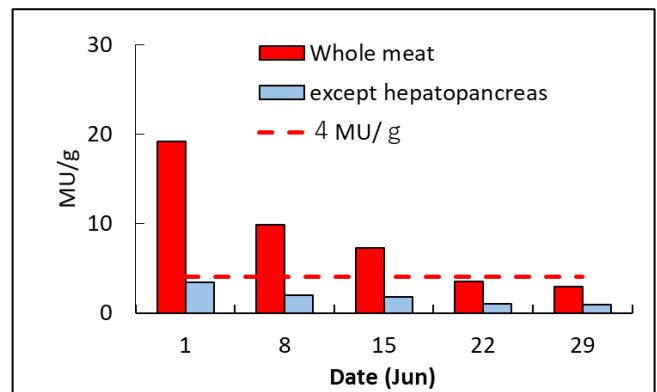


図 軟体部及び肝臓を除去した軟体部の毒力換算値の推移、破線は基準値の 4 MU/g

引用文献

田邊 徹ら (2020) 下痢性貝毒によるマボヤ *Halocynthia roretzi* の毒化と毒の器官偏在、日水誌、**86**(6)、476-483

田邊徹ら (2025) マボヤ *Halocynthia roretzi* における麻痺性貝毒の器官偏在、日水誌、**91**(4)、342-351

三倍体マガキについて

第一養殖生産チーム 技師 本多 陽世

はじめに

三倍体とは、通常の生物が染色体を2セット持っている（二倍体）のに対して、3 セットの染色体を持つ生物のことです。自然界にもみられますが、種なしスイカやバナナなどを人為的に作出する際に利用されています。

三倍体マガキについては、性成熟が抑制され、産卵や成熟にエネルギーをあまり使わないことから、産卵期である夏の軟体部重量が減少せず、また、産卵によるストレスを回避できることから、通常のマガキと比べて、産卵期の生残率が高いことが報告されています1)。

近年、本県のカキ養殖業では、高水温等の影響によるカキのへい死が増加しており、カキの生産量が減少傾向にあります。このことから、性成熟を抑制することで品質の向上や生産安定を図ることが期待できる三倍体の導入へ興味が高まっています。本県では養殖実績が無いことから、二倍体と三倍体を比較して、成長等にどの程度優位性があるのかを確認するため、養殖試験を実施しています。

三倍体マガキの作出について

三倍体は受精卵が減数分裂する際に物理的刺激（水温、水圧等）や薬品処理を加え、染色体（極体）の分離を抑制する方法のほか、四倍体と二倍体の交配により作出されます。

令和4年度からカフェインと加温処理による第二極体放出阻止による方法で三倍体マガキの作出試験に取り組んでいます。これまで14回作出試験に取り組み、計4回採苗することができました（図1）。三倍体カキの作出技術は既に確立されていますが、マニュアル通りに作出しても、三倍体になる割合（倍化率）にばらつき（5.1～92.6%）が大きいことや、

幼生飼育の段階で大量へい死があるなど、倍化率の高い種苗の安定生産は経験と技術が必要です。



図1 作出した養殖試験用稚貝

令和5～7年度比較養殖試験について

令和5年10月から女川町尾浦漁港地先の青年部筏にてバスケットで試験養殖を開始し（図2）、月1回程度生残や成長等を確認しています。

成長について、殻高は三倍体、二倍体は同程度で推移しました。軟体部重量では、夏の成熟期に三倍体では重量の減少が見られず、二倍体では一度重量が減少しました（図3）。三倍体は二倍体と比較し、夏から秋にかけての成長の停滞があまりないことが分かりました。



図2 バスケット式養殖の様子



図3 軟体部重量の推移

成熟について、二倍体では6月から8月まで20個体中すべての個体で卵や精子が見られました。一方、三倍体では一部の個体でしか卵や精子が見られませんでした。また、三倍体の生殖巣は軟体部の一部に留まっているのに対し、二倍体は生殖巣が軟体部のほとんどを占めていました(図4)。三倍体は二倍体と比べて成熟個体の割合が低く、成熟しても生殖巣の一部しか発達せず、卵や精子を作りにくいことが分かりました。



図4 三倍体(左)と二倍体(右)の生殖巣の発達(赤丸部分が生殖巣)

へい死について、秋(令和6年9月)と冬(令和7年1月)に垂下種苗の全数調査を行い、へい死率を確認したところ、秋のへい死率は二倍体に比べ三倍体の方が低くなりましたが、1年子(満1歳)の結果のため、引き続き2年子も調査していきます。

これらのことから、三倍体カキには通年出荷や、産卵に伴う衰弱やへい死の対策といったメリットが期待されます。一方で宮城県は三倍体カキ養殖が根

付いていないため、新たに導入する際には地域の合意形成が重要であると考えます。

今後も引き続き養殖試験を行い、養殖期間が長い場合の比較も行っていきます。

引用文献

1) 赤繁悟(2002) 人為三倍体マガキの遺伝的特徴に関する研究、広水試研報、21、5-56

仙台湾のアカガイ調査報告 ～大型アカガイが生息する操業区域外的重要性～

環境資源チーム 技師 村上 真夏

はじめに

アカガイは、内湾及び沿岸浅海域の泥域に分布する二枚貝です(図1)。仙台湾の水深20～30mに分布するシルト帯はアカガイの好漁場となっています¹⁾。

宮城県におけるアカガイの水揚量(図2)は、約20～120tの範囲で変動し、年によりまひ性貝毒による出荷自主規制が長期化することで水揚量が大きく減少します。出荷自主規制が長期化した2018、2020、2022年(赤矢印)を除いた水揚量をみると資源動向は横ばい傾向です。

閑上が国内の代表的な産地であるなど仙台湾産アカガイの評価は高く、宮城県にとって重要な水産資源となっています。



図1 アカガイ

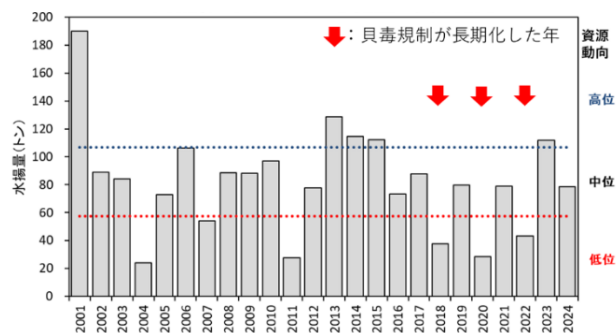


図2 宮城県のアカガイの水揚量と資源動向

調査内容について

水産技術総合センターでは、アカガイの資源動向や生活史特性の変動を把握するため、操業区域であ

る共同漁業権の内側(以下、区域内)と非操業区域である外側(以下、区域外)でアカガイの資源量の調査を実施しています。アカガイは移動能力が高くないことから、「区域内よりも区域外の方が、大型で高齢のアカガイが生きているのではないかと考え、区域内と区域外で採取したアカガイを測定、年齢査定、解析(各年の資源量指数、殻長組成、軟体部重量組成、年齢組成、成長曲線、死亡率の推定)した結果について紹介します。

(1) 調査方法

2021年～2024年の7、9月に共同漁業権第154号及び158号の区域内6～12点、区域外3～4点で調査を実施しました(図3)。各地点で貝桁網を15～30分曳網し、アカガイを採集しました。採集したアカガイは、殻長、軟体部重量を測定後、貝殻を切断して透明帯を計測することで年齢を調べ、殻長と年齢を von Bertalanffy の成長式に当てはめました。資源量指数には各年の CPUE (曳網1m当たりの採集個体数)を用い、死亡率は年齢別個体数から推定する方法²⁾を用いました。

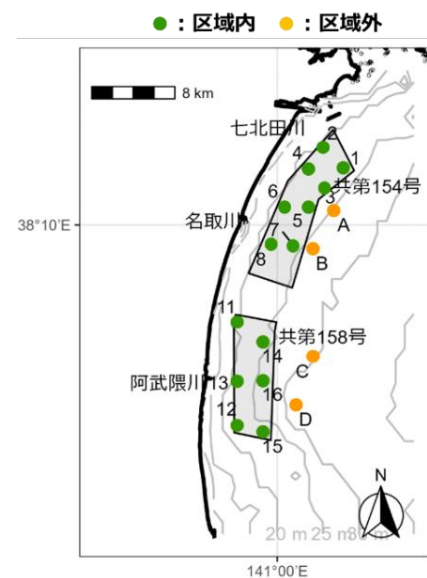


図3 調査地点

(2) 調査結果

区域内外で資源量指数に大きな差はなく、殻長組成、軟体部重量組成、年齢組成、成長曲線を比較したところ、区域外が区域内を上回る結果となりました。年齢組成では、区域外において20歳を超える個体を確認されました(図4)。そして、死亡率は区域の方が高い結果となりました(表1)。

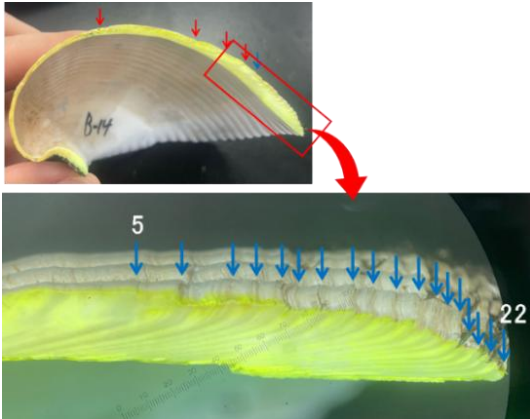


図4 アカガイの切断面(22歳)

項目ごとの結果(表1)から、区域内よりも区域外の方が、大型で高齢のアカガイが生き残っていることが分かりました。区域外では漁獲がないことから、大型で高齢の個体が生き残っていると考えられます。成長曲線では、区域間で成長に差が見られ、区域内では成長の良い個体から選択的に漁獲されている影響を受けた可能性が考えられます(図5)。

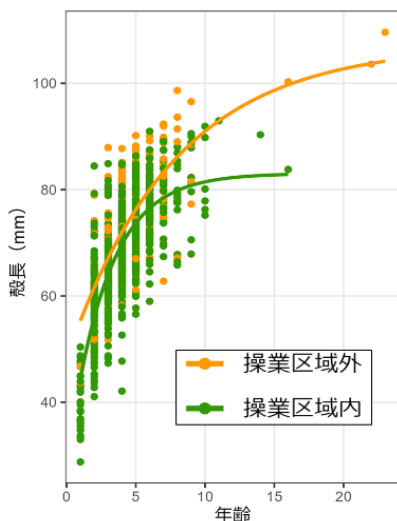


図5 成長曲線

表1 項目ごとの調査結果

項目	比較	
資源量指数	操業区域内	≒ 操業区域外
殻長(mm)	操業区域内	< 操業区域外
軟体部重量(g)	操業区域内	< 操業区域外
年齢構成	操業区域内	< 操業区域外
成長曲線	操業区域内	< 操業区域外
死亡率	操業区域内	> 操業区域外

今後の見通し

アカガイの抱卵数や産卵量は、貝の大きさが大きいほど増加することが知られています³⁾。本研究では、操業区域内外で資源量指数に差はなかったことから、大型の貝が生息する区域外では、個体群としての総産卵量が多い可能性があります。このことから、区域外で産卵された稚貝が区域内へ加入する可能性など、区域外は産卵資源の維持に重要な役割を果たしている可能性があることが分かりました。

引用文献

- 1) 矢倉浅黄・鈴木貢治(2019) 仙台湾南部海域におけるアカガイ調査の結果について、宮城水産研報、19、45-48
- 2) Ricker WE.(1975).Computation and interpretation of biological statistics of fish populations. 382pp.The Blackburn Press, Ottawa,Canada.
- 3) 佐々木良(1997) 仙台湾におけるアカガイ加入初期過程に関する再検討、宮城水産研報、15、69-79

未来へつなぐ海の恵み～アカガイ種苗生産の取組～

第二養殖生産チーム 総括研究員 上田 賢一

はじめに

アカガイは北海道南部から九州にかけて、水深 5～50m までの内湾砂泥底に生息する二枚貝で、主に貝桁網漁業で漁獲されます。

宮城県沿岸は、古くからアカガイの漁場として知られ、特に名取市閑上地区や石巻市渡波地区では高品質なアカガイが水揚げされることで全国的な評価を得てきました。アカガイは、漁獲量の変動が大きく、資源の維持管理が重要と考えられています。宮城県水産技術総合センターでは、漁業者が持続的にアカガイ漁を行える環境づくりの支援の一環としてアカガイの種苗生産に取り組んでいます。



図1 日本有数のブランド貝「宮城県産アカガイ」

種苗生産の流れ

種苗生産は親貝に卵を産ませ、浮遊幼生と呼ばれる貝の子供を育てることから始まります。

当センターでは、十分成熟した親貝に温度による刺激を与えることで人為的に産卵を誘発します。卵は受精から約 24 時間後にはふ化して幼生となり、約 3 週間浮遊生活を送ります。

大きさが 230 μ m を越え、眼点と呼ばれる光を感じる感覚器官が形成される頃になると、固着するための足糸と呼ばれる糸状の器官を出して物に付着

します。この頃になると、飼育水槽内にリボン状の採苗器を入れ、付着させて採苗します。採苗後、更に 2 ヶ月程飼育して 2 mm 程度にまで成長した稚貝を漁協が行う中間育成用として出荷します。飼育中は市販されている濃縮餌料（植物プランクトン）を給餌します。

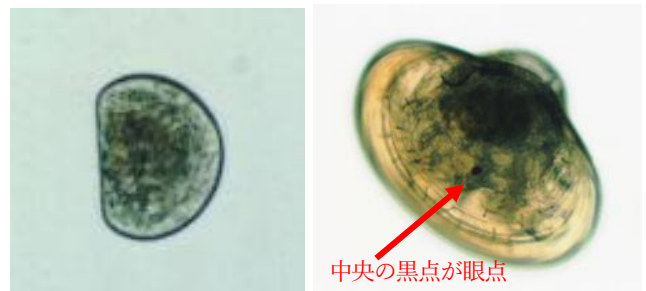


図2 浮遊幼生（左：D 型幼生、右：眼点幼生）

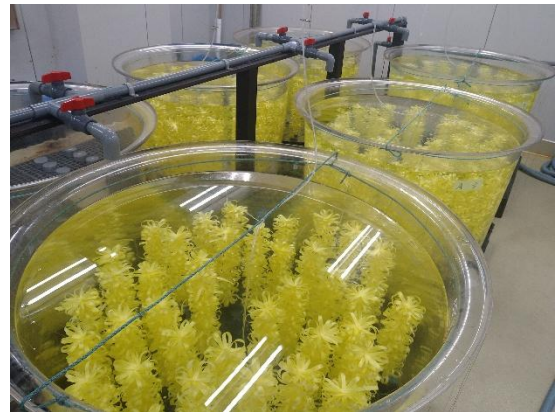


図3 採苗器を入れた飼育水槽

アカガイ漁業の未来に向けて

海で中間育成された稚貝（2～3 cm）は漁場に放流後、生き残った貝の一部は親貝となって子供を産み、資源造成の基盤となります。閑上地区では漁業者自らも種苗生産施設を整備し種苗生産の活動を始めており、安定した種苗生産を目指しています。当センターでは、資源管理の取組と合わせて、漁業者が持続的にアカガイ漁を行えるように今後とも種苗生産の取組を支援していきます。

暖水性魚種及び低・未利用魚種の活用に向けた取組

水産加工開発チーム 技師 菅原 幹太

はじめに

近年、増加傾向にある暖水性魚種（試験研究対象魚種：タチウオ、チダイ、アカムツ、サワラ、シイラ、カマス）やこれまで加工原料として利用されてこなかった低・未利用魚種（試験研究対象魚種：主にエイ類）の加工原料の利用を目的に栄養成分、呈味成分の分析や加工工程ごとの歩留まり、加工品試作などに関する取組を行ってきました。詳細は宮城県水産技術総合センターだより（第1号、第2号）で紹介していますが、今回はこれら研究で得られた成果の普及活動についてご紹介いたします。

県内への普及活動

暖水性魚種、低・未利用魚種の加工利用を図るため、水産加工開発チームによる企業訪問時や企業による水産加工公開実験棟の利用の際に漁獲月別やサイズ別での水分や粗脂肪、粗たんぱくなどの栄養成分分析結果やグルタミン酸などの呈味成分分析結果等（図1～4）について情報提供するとともに、興味を示す企業に対して、原料サンプルや試作加工品を提供し、伴走型で支援を行っております。

また、令和7年1月21日に石巻市で開催された第49回宮城県水産加工品品評会の会場で事業PRブース（図5）を設置し、県内の水産加工企業に対し、試作加工品の展示と加工利用に関する意見を得るとともに、品評会内で開催された研修会では関係者に事業の情報提供を行いました。また、これまでの利用加工研究の成果を基にした支援により、チダイやアカエイなどを利用した加工品の商品化に至っております。

我々の取組は県内の水産加工企業への周知のみならず、一般県民の皆様に対しても行っており、みやぎ出前講座やTV、新聞などの報道機関によるPRを行い、暖水性魚種及び低・未利用魚種の認知度向

上及び消費拡大に取り組んでおります。

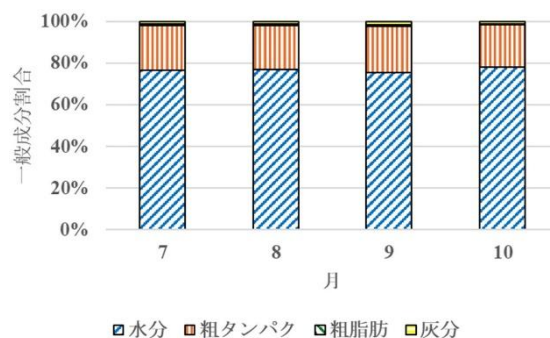


図1 シイラ（1kg未満）の栄養成分分析結果

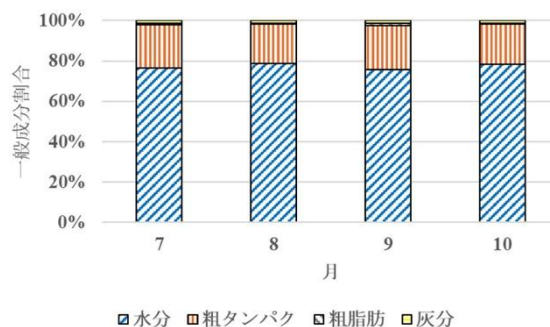


図2 シイラ（1kg以上）の栄養成分分析結果

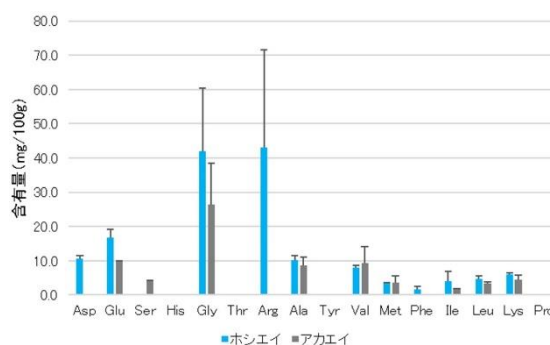


図3 エイ類の呈味成分分析結果

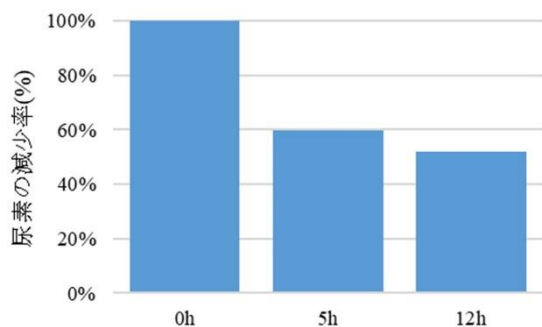


図4 アカエイの水さらしによる尿素量の減少率



図5 第49回宮城県水産加工品品評会でのPR

県外への普及活動

横浜市で開催された都道府県試験研究機関が集まる利用加工研究会において、本県の研究事例発表・取組に関する情報共有を図り、研究の向上に努めております。さらに令和7年8月20～22日までの3日間、東京ビックサイトで開催された「第27回ジャパン・インターナショナル・シーフードショー」の宮城県ブースに出展を行っています（図6）。

その他、令和7年6月には先進事例調査として長崎県を視察し、低・未利用魚種の利活用方法について、情報収集も行っております。

これまで馴染みのなかった魚種の加工利用方法などを他地域から情報収集し、その得た情報を県内の水産加工企業などに情報発信することで課題となっている加工用原魚不足解消の一助となるよう取り組んでおります。



図6 シーフードショーでのPR

最後に

暖水性魚種、低・未利用魚種については、依然、認知度が低いと考えられることから、水産加工企業や一般県民の皆様への継続した周知が必要であると考えております。

そのため、当チームでは引き続き成分分析や加工品試作などを行い、その成果を県内の水産加工企業に対して、広く普及することで加工利用促進を目指すとともに、認知度向上及び消費拡大のため、各種イベントや県のHP、SNS（Instagram）を通じて、一般県民の皆様に対するPR活動を引き続き実施していきたいと考えております。

普及情報

養殖ワカメの「ブチ」について

気仙沼水産試験場普及指導チーム 技術次長 田代義和

養殖ワカメに巣食う悪いヤツ

ワカメ養殖をしている漁業者の皆さんの困りごとに「ブチ」の発生があります。この「ブチ」はワカメの葉の部分に開く小さな穴のことを指した言葉です。この穴は少数なら問題ないのですが、しばしば漁場全体でワカメの葉全体が穴だらけになって、品質を著しく低下させます（図1）。

この「ブチ」ですが、微小な甲殻類の幼生がワカメの葉の中に寄生することで起こります。この寄生性甲殻類による穴あき症を「タレストリス寄生症」と呼びます。



図1 寄生されたワカメ

タレストリス寄生症って何？

タレストリスとは寄生性の小型甲殻類の総称で、本症は「アメノフィア・オリエンタリス」という甲殻類の幼生がワカメの葉に寄生して発症します。

実は、この穴あき症は新しいものではなく、昭和50年代には知られていました。そして、昭和60年に三陸沿岸で大発生して大騒ぎになり、広く認知されるようになりました。現在も時折猛威を振るっては、ワカメ漁業を行う方々の心胆を寒からしめています。

アメノフィア・オリエンタリスの生活史

アメノフィア・オリエンタリスは大きさが1mm前後の小さな甲殻類（図2）で、成体はワカメの葉上に付着し、葉の茶色い部分（皮層）を食べながら生活しています。成熟した雌は一度に数十個の卵を産み、ふ化するまで自分の体に抱えて保護します。卵から生まれた幼生は直ぐにワカメの葉に穴を開け、その中に入って、ワカメの葉の内部の透明な部分（髄層）を食べながら成長し、3段階の変態を経て30日ほどで成体になります。成体になると穴から出て生活するため、葉には穴だけが残ります。これが「ブチ」の正体です（図2）。



図2 アメノフィア・オリエンタリスの成体（左）と第Ⅰ期幼生（右上）、第Ⅲ期幼生（右下）

駆除はかなり難しい

アメノフィア・オリエンタリスを駆除する方法は無いわけではありません。この種は塩分濃度の変化に敏感で、17‰以下の低塩分では5分と生きられず、海水重量の10%量の食塩を添加した高塩分海水では即時に死に至ります。この塩分濃度の差を利用した駆除方法が検討され、実際に試験を行ったことが

ありました。淡水及び高塩分海水どちらも、成体と幼体に対する駆除効果はあったものの、ワカメを養殖ロープに付けたまま浸漬するという作業効率の悪さや漁場全体で取り組まないと効果がないということがネックとなって普及には至りませんでした。

このことから、効率的な駆除方法が考案されるまでは、寄生が見られた漁場は被害が拡大しないうちに優先的に収穫して商品価値を維持するのが当面有効な手段と言えます。

普及情報

イワガキの人工採苗支援

企画・普及指導チーム 技術主査 佐藤 好

近年、本県沿岸漁業では海水温の上昇が課題であり、高い水温でも養殖を行える種が求められています。本県地先海面では特に夏場の海水温が上昇し、冷水性養殖種であるホタテガイ及びマボヤがへい死するなど大きな影響を受け生産量が減っています。このように、養殖環境が厳しくなっている中、比較的高水温に強いとされるイワガキに関心が高まっており、今年度から中部地区管内の指導漁業士2名が養殖試験（人工採苗）を開始し、当センターで支援を行っていますのでその一部を紹介します。

はじめに、8月下旬に地先のイワガキ母貝の熟度確認を実施し、十分に採卵を行える状態であることが確認されたため、9月中旬に採卵を実施しました。

イワガキの卵は採卵翌日にはふ化し、約200万個の浮遊幼生を飼育水槽に収容し、現在も飼育を行っています（写真1）。イワガキは順調に成長するとふ化から1か月前後で採苗器に付着します（写真2）。付着後も生残率を高めるために採苗器のまま水槽内で飼育を継続し、殻長が2mmほどに成長したら沖出しし、殻長10mmほどになったら本養殖（挟込み）を行う予定です。

両漁業士はホタテガイ及びホヤ養殖以外の主要養殖種となりうる新しい魚種としてイワガキ養殖を確立し、後継者が安心して今後も養殖業を営めるようにしたいとのことです。

本県地先海面の環境変化に適応した新たな養殖種としての可能性を探るべく、今後も引き続きイワガキ養殖技術普及に向けた支援を行ってまいります。

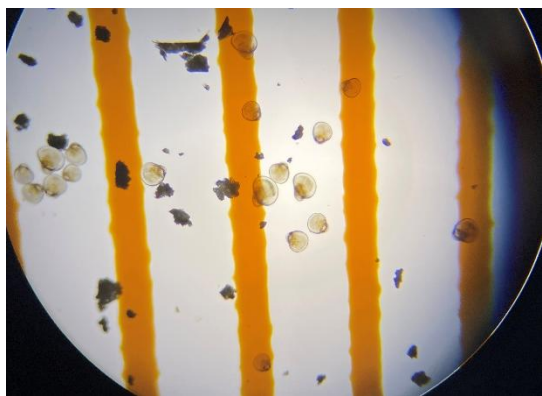


写真1 イワガキ浮遊幼生



写真2 付着した稚貝

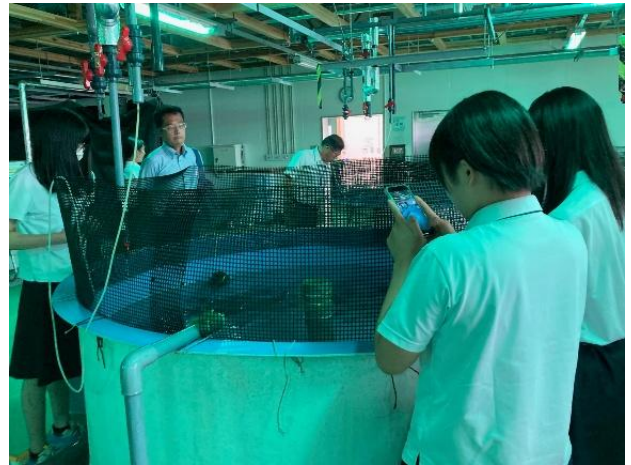
トピックス

石巻好文館高校「総合的な探求の時間」への協力

当センターでは、石巻好文館高校の依頼を受け、SDGs に関する地域課題研究をテーマとした同校 1 年生の総合的な探求の時間への講師派遣や、生徒による当センター施設見学の受入を行いました。

5 月に事前学習の場で水産試験研究の取組を紹介し、「石巻の海」や当センターの取組に関心を持った生徒グループを対象に、8 月にセンターの本館及び閉鎖循環式陸上養殖研究棟の見学を実施しました。

(企画・普及指導チーム)



インターンシップを開催しました

当センターでは、令和 7 年 9 月 1 日から 3 日間の日程で、3 名の学生を受け入れました。

本県の水産業の現状やセンターの業務内容について説明を行った後、魚体の測定や標本作製などの実務体験を行いました。また、水産関係団体（魚市場、水産加工企業等）を訪問し、業界が抱えている課題や取組について意見交換を行いました。

御協力いただきました、石巻魚市場株式会社、山徳平塚水産株式会社の皆さんに対しまして、誌面を借りてお礼を申し上げます。(企画・普及指導チーム)



ノリ漁場環境調査が始まりました

令和 7 年 9 月 9 日から今漁期のノリ漁場環境調査が始まりました。

松島湾の水温が 23℃を下回る 9 月後半から湾内でノリの育苗が開始されますが、近年は高気温・高水温の影響により開始が遅れる傾向にあり、今漁期もピークは 9 月下旬から 10 月上旬となりました。

このため、生産が遅れている地区もありますが、漁場の栄養塩は昨年より安定しており、ノリの色は悪くないようです。11 月 27 日の初入札に向け、11 月上旬から各地区で摘採が始まっています。(第一養殖生産チーム、企画・普及指導チーム)



トピックス

研究成果発表会を開催しました

令和7年9月18日に石巻市で当センターの試験研究成果発表会を開催し、漁船漁業、養殖業、内水面漁業、水産加工業の各分野について、若手研究員が最新の情報を報告しました。

当日は、大学や国の研究機関をはじめ、市町、漁業協同組合、漁業者など幅広くご参加いただきました。

近年、漁場環境の変化が著しいこともあり関係者の関心は高く、積極的な質疑応答や意見交換が行われました。

なお、発表課題や配布資料は、次回開催(来年9月)まで当センターのホームページに掲載していますので、ご活用ください。(企画・普及指導チーム)



研究成果発表

- ▼ 海底動画システムを用いた刺し網漁獲物を食害するヨコエビ類の摂餌行動観察
環境資源チーム 石川 哲郎
- ▼ 漁獲圧の異なる海域で採取したアカガイの生活史特性の変動
環境資源チーム 村上 真夏
- ▼ 三倍体マガキの養殖試験について
第一養殖生産チーム 本多 陽世
- ▼ 宮城県内の河川におけるカワウの食性について
第一養殖生産チーム 庄子 充広
- ▼ 暖水性魚種の活用に向けた取組み
水産加工開発チーム 菅原 幹太



石川 研究員



村上 技師



本多 技師



庄子 研究員



菅原 技師

トピックス

「浜と水試の情報交換会」を開催しました

気仙沼水産試験場では、令和7年9月4日に「浜と水試の情報交換会」を開催しました。試験場が取り組んでいる調査研究・普及活動のうち6課題について、成果報告を行うとともに、漁業者・関係機関との意見交換を実施しました。

当日は、管内の漁業関係者、漁業協同組合や水産関係団体の職員、行政機関の水産担当者など約40名の参加がありました。

近年の環境変化と相まって、地域の重要な資源であるアワビやシロサケ、主要な養殖種であるワカメなどが抱える課題について、多くの質問や意見が寄せられました。（気仙沼水産試験場）



研究成果発表

- ▼ 令和7年の海況について
地域水産研究チーム 遊佐 和洋
- ▼ エゾアワビの漁獲物調査と放流効果の検証について
地域水産研究チーム 上野 あゆみ
- ▼ ワカメの「ぶち」について
-タレストリス寄生症の原因生物とその特徴-
普及指導チーム 田代 義和
- ▼ 2024年1～3月に宮城県沿岸養殖へ被害をもたらした時化に対する海流の影響
地域水産研究チーム 田邊 徹
- ▼ さけ稚魚放流時期における気仙沼沿岸域の海洋プランクトンについて
地域水産研究チーム 小野寺 淳一
- ▼ 女性部によるフノリ増殖活動について
普及指導チーム 鈴木 矩晃



上野 研究員



鈴木 技術主査

発行：宮城県水産技術総合センター

〒986-2135 宮城県石巻市渡波字袖ノ浜 97 の 6

TEL 0225-24-0130 FAX 0225-97-3444

<https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/mtsc/>